

2015. 11. 17 (火)

「ともに」の関わりに見出される希望

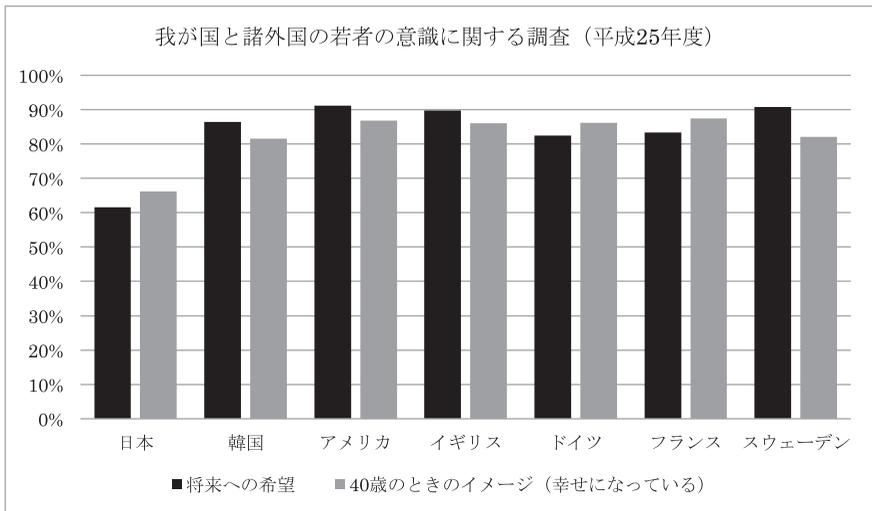
白波瀬 達也

希望のない国、日本

僕がこちらで話をするのは去年に引き続き2回目になります。大学の仕事のなかでは人権や希望を正面から語ることがほとんどないので少々緊張しています。きょうは、「希望について語るように」とお題をいただいたのですが、僕自身は日頃、あまり希望というものを見いだしていないというか、むしろ、希望のない社会だなということを考えながら生きている人間です。そうしたなかで、何が希望なのだろうかということをいろいろ

考えながら、きょうの話の準備をしてきました。

最初に、皆さんに問い掛けさせてください。他の先進諸国と比べて日本の若者がどのようにして「将来の希望」を捉えているのか、大きな統計で見たいと思います。日本を含めた7カ国の13歳から29歳の若者を対象にした意識調査「我が国と諸外国の若者の意識に関する調査（平成25年度）」の結果に基づくもので、平成26年版の「子ども・若者白書（概要版）」に収録されています。



さて、この調査の「自らの将来に対するイメージ」という項目のなかにある「将来の希望」と「40歳になった時のイメージ」というものをピックアップしてみました。いずれからでも、日本の置かれた状況の厳しさが分かると思います。

ただ、この調査結果だけを見て日本には希望がないと早合点するのではなく、誰が希望をもっているか、誰が希望をもっていないのか考えることが大事だと僕は考えています。つまり、この日本のなかにも、将来に対して希望にあふれている人と、希望をもつことが難しい、あるいは「希望って何？」というふうになかなか希望をもち得ない人たちが、分断されている状況があるのではないかと思います。

では、皆さんはどちらでしょうか。希望をもっているのか、それとも希望をもちにくいのか、どちらに位置するでしょうか。そのことも、自分の問題として考えてほしいと思います。恐らくいろいろな人がここにいます。君たちはある程度希望をもって日々生きていくのではないかと思います。あるいは、希望をもち続けたいためにこの大学に入り、そして、この大学を出た後の将来のことについてもいろいろ考えているのではないかと思います。

希望をめぐる分断

山田昌弘さんという有名な家族社会学が作った概念に「希望格差」というものがありますが、皆さんはご存知でしょうか。バブル経済崩壊以降、日本は、格差社会に突き進んでいったという言説がたくさんあります。「格差社会」といったときに、所得格差、要

するに経済的な格差に多く目を向けるような傾向があったのですが、山田昌弘さんは、『希望格差社会―「負け組」の絶望感が日本を引き裂く』（2004、筑摩書房）のなかで「希望にも格差が生じている」という視点で問題提起されました。

では、どのようにして希望の格差が生まれるのでしょうか。山田昌弘さんは、ニューエコノミーによる正規雇用と非正規雇用の分断に要因を見出しています。新しい経済体制に変わっていくなかで正規雇用と非正規雇用が分断されるような状況がつくられてきた、分かりやすく言えば、非正規雇用というものがどんどん増大してくるということ、そして、非正規雇用から正規雇用に移っていくことがとても難しい、このような社会状況を指摘しています。非正規雇用の問題というのは諸外国においてもあるのですが、日本において顕著にこの問題を深刻にさせているのは、新卒一括採用という慣行だと山田昌弘さんは指摘しています。恐らくここにいらっしゃる皆さんは、新卒一括採用で就職していく人たちではないかと思っています。正規雇用という職を得ながら、何とか希望をもちながら生きていこうとするのではないかと思います。

講義でもこのような話をしばしばしますが、学生が書くコメントで特徴的なものがあります。それは「自分は講義を受けて恵まれた環境のもとで育ってきたということに気付いた。親に感謝したい」というものです。こうしたコメントは本当によく見かけます。また、「希望をもてるように努力することが大事だ」というコメントもよく見かけます。つまり自助努力がもっと必要だという主張です。このようなコメントは一般的なものですし、皆さんにとっても違和感なく受け止めら

れるのではないのでしょうか。でも、僕は少しむなしくなるというか、これで本当にいいのだろうかと考えてしまうことがあります。

僕の釈然としない思いを皆さんと共有するために苅谷剛彦という教育社会学者の指摘を取り上げます。彼は、『学力と階層』（2012、朝日新聞出版）という本のなかで「学習資本」という言葉を使って「頑張るとか努力するということも、実は階層に規定されているのではないか」と述べています。学ぶことへの意欲をもつということは、誰にも平等に与えられているように見えて、実際のところは社会的につくられている。意欲も社会が生み出している。こういう指摘なのです。つまり、意欲格差が社会階層に規定されやすいということを皆さんの頭の片隅に入れてもらえたらいいかなと思っています。

異人と隣人

2012年の子どもの貧困率が過去最悪を示していることを、皆さんはご存じでしょうか。日本では子どもの貧困がどんどん深刻化していて、今はこれがとどまるどころを知らない状況にあります。子どもの貧困というのは、世帯所得の中央値の半分未満を示すのですが、どれくらい居るかという6人に1人が子どもの貧困状態、つまり相対的貧困の状態にあるということです。数で言うと325万人で、これからも増え続けると予測されています。

ハイティーンのときから低学歴状態で働く。その場合、非正規雇用であることが多く、不安定であるがゆえに失業を繰り返す。このようなパターンは多く見受けられます。彼らが収入の手段を絶たれ、親族からの援助

も受けることができない場合、生活保護を受けることもあります。われわれはこうしたことに非寛容ではないのでしょうか。「失業したのは自己責任。まだ若いのに生活保護を受けることは不適切だ」と。直接的に言動していなくとも、心のどこかでこうした思いをもって彼らを排除していることがあるのではないのでしょうか。

もし、こうした排除意識があるとするならば、そのポイントはどこにあるのでしょうか。僕は「生産性」、「有用性」にあるのではないかと考えています。こうした考えは奥田知志さんの本に影響を受けています。皆さんは奥田知志さんという人を知っていますか。関学の神学部出身者です。今は福岡県北九州市で牧師をしながらホームレス支援の活動をしています。その活動は全国的に注目されています。

奥田知志さんは『もう、ひとりにさせない』（2011、いのちのことば社）という本で「排除される人々は、一種の異人」だと述べています。異人とはつまりよそ者です。よそ者ですから同じ人間とはみなされません。「同じ人間ではないと認識することで良心の呵責（かしゃく）は免責され、むしろ、異人の排除という犯罪行為が、誇りに転嫁してしまう」ということです。たとえばヘイトスピーチの問題などを考えてみても、恐らくそうなのではないかと思います。彼らは、誇りをもって排斥しているわけですよ。それが犯罪的行為であるという認識は薄く、ある意味で、自分たちの誇りのためにやっている側面があります。

こうした排除が横行する一方で、奥田知志さんはキリスト教の信仰に基づき別の見方を提示します。彼の著書のなかで「福音は異人

(とされた人々)を隣人とするのだ。和解の神の働きは、『隣人となる』ということによって現れる」と述べています。また、異人を隣人に、これは希望の言葉である」とも述べています。

皆さんにとって異人は誰ですか。異人と聞いて、具体的に何か思い浮かびますか。僕は大学生の頃から、この異人という言葉にものごく関心をもってきました。少しだけ自分の話をします。僕は10数年間ホームレス支援の研究をしています。学生の頃から関心がありました。当時、僕にとってホームレスは異人だったのです。奈良の新興住宅地で育った僕のような人間にとって、ホームレスは身近にいない存在です。ただ、そのような異人は、大都市の市街地に出るとたくさんいるということが大阪の予備校に通うようになったときに分かりました。彼らがどのようにして生み出されるのか、日々何を考えて生きているのか、なぜこのような状態になったのかとても知りたいと思い、大学院に入った20代半ばから本格的に研究をするようになりました。そこで得た知見は『釜ヶ崎のスヌメ』(2011、洛北出版)という本と『宗教の社会貢献を問い直すーホームレス支援の現場から』(2015、ナカニシヤ出版)という本にまとめたのでよかったです読んでみてください。

この5年ぐらいは、いわゆるベトナム難民の研究をしています。彼らの多くは皆さんが生まれる前に日本にやってきましたが、その体験がどのようなものだったのか、生活史の聞き取りをしています。やはり僕が研究をはじめた当初、ベトナム難民は異なるバックグラウンドをもった見知らぬ存在=異人でした。しかし研究を継続させていくなかで、

具体的な人間関係もでき、彼らの存在が非常に身近に感じられるようになりました。

さきほどから「異人」という言葉を何度も使っていますが、皆さんに問いかけたいと思います。「異人は異人のままなのか、それとも隣人になり得るのか」。どうなのでしょう。僕自身は、人権的な問題意識から異人の関わりをもとうとした人間ではありません。彼らを社会的に排除されている人たちに見立て、その包摂を目指すような目的で研究を進めてきたわけではないのです。むしろ、日本人のマジョリティと大きく異なるバックグラウンドをもつ人たちの存在を社会的な関心から明らかにしていきたいと考えてきました。

具体的な関わりを続けていくなかで、自分の在り方が問い直されていくということをししばし経験しました。特にホームレス状態にある人たちや難民は、社会から排除されやすく、弱い立場に立たされやすいです。このような人たちとの交わりを続けていくなかで、関わりの視点や態度が常に問われるようになってきました。どのような関わりをもてば彼らの生活に肉薄できるのか、彼らの意思や価値をどのようにしたら理解することができるのか。こんな思いを持ちながら彼らの生活に分け入る機会を探ってきました。そのなかで僕がとったひとつの方法は「現場に出る」ということです。本や大学の講義で学んだことはきっかけで、もっと大事なことは、現場に出て彼らと直接触れること、継続的に触れることです。そのなかで関わりの形が変わってきました。

「ために」から「ともに」へ

この経験を皆さんと共有するために、「ために」と「ともに」という二つの言葉の違いについて取り上げます。これは、本田哲郎さんというカトリックの司祭の『釜ヶ崎と福音—神は小さく貧しくされた者とともに』（2015、岩波書店）から引用したものです。皆さんは社会的な問題に関わろうとするときに、「ために」という関心からスタートさせることが多いのではないかと思います。ボランティアなどはその典型だと思います。僕も正直なところ「ために」という意識で何かをやろうとすることが多いです。本田哲郎さんが面白いのは「ために」という関わりがある意味で危ういと指摘していることです。「誰かのために」という態度は普通、崇高な行為だと思われるわけですが、危ういと述べているのです。本田哲郎さんは、「ために」という関わりはときに自己防衛的なものになりやすい。どうしても「自分の生活を変えないで済む限り」といった関わりになりやすい。こうした壁を突破するために、「ために」から「ともに」へ関わりの形を転換していく必要があるのではないかと述べています。

「ともに」というのは、痛みを共感するところから突き動かされる行動です。重たいですよ。本田哲郎さんは聖書学者でもあるのですが、聖書の丹念な読み直しのなかで、福音的な関わりというのは「ために」から「ともに」への踏み込んだ関わりであると述べています。これを、僕流に少し言い換えてみたいと思っています。恐らく「ために」というのは三人称を対象にしていますよね。彼らのために、あの子のために、

あの子のためにと言った具合に。一方、「ともに」の対象は一人称。すなわち「われわれ」なのです。

つまり「ために」というのは、自分と切り離された他者であるのに対して、「ともに」というのは、われわれ、私たち、俺らというような、自分も含めた他者なのです。このように「ともに」の関係が構築できると、見えてくる世界が違うのではないかと思うのです。本田哲郎さんはこのことをストレートには言っていませんが、僕は彼の本を読むなかで、「ともに」というのは一人称の視点を獲得することではないかと考えています。では、「ために」から「ともに」になることで何が変わるのか。そのことで状況が簡単に好転することはないでしょうが、僕はこうした態度変容こそが希望だと思っています。

最初の話に戻ります。日本の若者は諸外国の若者と比較すると、将来への希望が乏しかったり、幸福なイメージをつかみにくかったりします。学ぶ意欲についても7カ国のなかで日本は最低の部類に入っています。

なぜこのようになってしまったのでしょうか。僕はその理由のひとつが「ともに」と思える他者の存在が不明確であるからだと考えています。僕の場合、「ともに」と思える対象は研究をきっかけに少しずつ増えてきました。皆さんの「ともに」はどこにありますか。もし今、見当たらないのであれば、大学生活のなかで見つけることができればいいのではないかと思います。本日のお話をさせていただきました。

(社会学部准教授)